

## 学会記事

### 第30回徳島医学会賞及び第9回若手奨励賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなり、初期臨床研修医を対象とした若手奨励賞は第238回徳島医学会平成20年度冬期学術集会（平成20年2月15日、長井記念ホール）から設けられることとなりました。徳島医学会賞は原則として年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各回ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名に贈られ、若手奨励賞は原則として応募演題の中から最も優れた研究に対して2名に贈られます。

第30回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定し、第9回若手奨励賞は次の2名の方々に決定いたしました。受賞者の方々には第247回徳島医学会学術集会（夏期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は次号に掲載予定です。

#### 徳島医学会賞 (大学関係者)



氏名：小松正人  
生年月日：昭和56年4月28日  
出身大学：徳島大学医学部医学科  
所属：徳島大学疾患プロテオゲノム研究センター・ゲノム制御分野

研究内容：トリプルネガティブ乳癌の増殖メカニズムの解明および新規分子標的治療の開発  
受賞にあたり：

この度は第30回徳島医学会賞に選考して頂き大変ありがとうございました。選考委員の先生方、ならびに関係各位の皆様へ厚く御礼申し上げます。

本邦における乳癌の罹患率は年々増加しており、その中でもエストロゲン・プロゲステロンレセプター・HER2(ErbB2)の発現を欠くトリプルネガティブ乳癌（以下 TNBC）は転移・再発率が高く、また有効な分子標的治療が存在しないといったさまざまな問題点を有し

ています。

現在まで、徳島大学疾患プロテオゲノム研究センター・ゲノム制御分野にて、TNBCの増殖メカニズムの解明および新規分子標的治療薬の開発を目指して研究に取り組んでおりますが、今回の発表では網羅的遺伝子発現情報解析および in silico pathway 解析を用いることにより、プロテアソーム構成遺伝子による TNBC の増殖制御機構という新たな知見が得られたので報告させて頂きました。今後はその増殖制御機構の詳細なメカニズムについて分子生物学的手法を用いて探索し、新たな治療標的として TNBC の治療に少しでも貢献できればと考えております。

最後になりましたが、日頃より研究の御指導・御鞭撻を頂いております片桐豊雅教授をはじめ、同研究室の先生方に深く御礼申し上げます。また、研究に際し多くの御助言・御協力を賜りました共同研究の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

#### (医師会関係者)



氏名：八木恵子  
生年月日：昭和37年10月17日  
出身大学：徳島大学医学部  
所属：医療法人有誠会 手束病院

研究内容：「コロンブスの卵」的発想にもとづいた体位変換用マットの試作

受賞にあたり：

この度は、第30回徳島医学会賞に選出していただき、誠にありがとうございます。選考委員の先生方をはじめ、関係各位の皆様へ深く感謝いたします。実は、第7回徳島医学会賞も受賞させていただいており、今回で2度目の受賞となります。前回の研究内容は、「褥瘡に対するラップ療法の試み」でした。以後も、褥瘡治療にずっと関わってきましたが、褥瘡発生を防ぐことができず、悶々とした日々が続いていました。「1000分の1ミリでも身体を浮かせる何か良い方策はないか？」と自問自答するうちに思いついたのが、今回の体位変換用マットです。差し込むのではなく、浮かせるという全く新しい発想にもとづいたものです。雑巾しか縫ったことのない私が、ミシンを使って縫い上げた作品に、徳島医学会賞という名誉ある賞をいただけて、本当に光栄です。まだまだ発展途上にある試作品ですが、商品化され、広く褥瘡

予防に役立てればと、夢は膨らんでいます。どうもありがとうございました。

#### 若手奨励賞



氏名：高木恵理  
生年月日：昭和60年3月25日  
出身大学：徳島大学病院卒後臨床研修センター

研究内容：妊娠を契機にATⅢ欠損症を発症し、血栓管理後に出産に至った一例

受賞にあたり：

この度は徳島県医学会第9回若手症例賞に選考頂き、誠に有難うございました。選考して下さいました先生方ならびに関係者各位の皆さまに深く感謝申し上げます。

ATⅢ欠損症は先天性の凝固素因疾患であり、本邦ではプロテインC欠損症、プロテインS欠損症に並ぶ三大先天性血栓性素因とされています。この疾患は外傷・小手術・妊娠等を契機に発症し、発症した血栓症は約60%が再発し、約40%に肺塞栓症の合併をみるとの報告があります。

私は2年間の初期研修のうち、計6ヵ月を徳島大学病院循環器内科で研修しました。この間、急性肺血栓塞栓症や低心機能による心室内血栓等、血栓性疾患の症例を何度か経験させて頂きました。今症例はその一例ですが、ATⅢ活性の低下によりヘパリン使用下でもAPTTが思うように延長しない点や、妊娠を契機とした発症であり、妊娠による血行動態・凝固線溶系の変化や、催奇形性や母乳への移行性から使用禁忌な薬剤を考慮する必要がある点で、これまでの経験例と少し異なっていました。循環器内科医師と産婦人科医師が共診で抗凝固療法および妊娠管理を行い、最終的に母子共に合併症のない出産に至りましたが、同年代の女性として感慨深く、同時に他科間での密な連携の重要性を実感した瞬間でありました。

最後になりましたが、研修期間中にこのような貴重な機会を与えて下さり、ご指導頂きました徳島大学循環器内科ならびに産婦人科の諸先生、スタッフの皆さま方に深く御礼申し上げます。

また日頃よりご指導・ご支援下さる卒後臨床センターの佐田先生、西先生、上田先生、渡部先生、梶浦先生、

スタッフの皆さま方にも深く御礼申し上げます。



氏名：小林直登  
生年月日：昭和62年10月24日  
出身大学：徳島大学医学部医学科  
所属：徳島大学卒後臨床研修センター

研究内容：高度進行肝細胞癌に対する放射線併用動注化学療法の有用性

受賞にあたり：

この度は徳島医学会第9回若手奨励賞に選考頂き誠にありがとうございます。選考して下さいました先生方、並びに関係者各位の皆様に深く感謝申し上げます。

肝細胞癌において門脈浸潤は最も予後を悪化させる因子であるといわれています。そのような患者さんに対して手術を行うことができなければ、たとえ肝予備能が保たれていても、治療法が限定されてしまいます。そういった患者さんに対し放射線治療は有用な治療の一つであり、重要な地位を占めています。また他癌種においては放射線治療と化学療法の併用により治療効果が高まる事が報告されていますが、肝細胞癌における報告はまだほとんどなされていません。そこで今回の研究では、そのような門脈浸潤を伴った肝細胞癌に対する放射線併用動注化学療法の当院での治療成績を検討しました。結果として、肝予備能が保たれていれば高い治療効果が得られ、比較的 safely に治療できることが示唆されました。

今はまだ肝障害などの副作用の観点から肝細胞癌に対する放射線治療はガイドライン上標準治療とはされていません。しかし肝予備能などを考慮し適切な症例を選べば、十分有用な治療であることを認識しました。更に今後研究を進めることにより、より有効な化学療法の組み合わせなどを明らかにすることが必要であると感じました。

最後になりましたが、研修中にこのような貴重な機会を与えて下さり、また非常に多くの御指導頂きました徳島大学消化器内科高山教授、谷口先生、田中先生並びに放射線科の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また日頃より御指導・御支援頂いております卒後臨床センターの佐田先生、西先生、梶浦先生、上田先生、渡辺先生、スタッフの皆様方に心から御礼申し上げます。